

座長：日下 勝博（江別訪問診療所）、藤原 純一（由利組合総合病院）

新型コロナウイルス感染者に対する電話診察について 当院の事例報告

日下 勝博

江別訪問診療所

【背景】

当院は、北海道江別市に拠点を置く在宅医療に特化した診療所です。普段は終末期の重症患者さんを主体に訪問診療していますが、新型コロナウイルスの流行以降、保健所・調剤薬局と緊密な連携体制を構築し、感染者への往診、あるいは電話診察を行っています。

【電話診察までの流れ】

新型コロナウイルス感染が判明した人は、保健所に報告され、観察下に置かれます。経過観察中に医師の診察が必要と保健所が判断した症例が当院に紹介されます。往診が必要な場合は往診し、電話で対応可能な症例は電話診察にします。

江別保健所は、札幌の北東部に広がる石狩管内（江別市・石狩市・当別町・新篠津村）の人口約 20 万人を管轄しています。今年 2 月のピーク時には 1 日約 120 人の新規感染者報告があり、毎日 4,5 人が電話診察の対象となっていました。

【電話対応の実際】

基本的に、呼吸不全の兆候が無い軽症例を対象としています。ほぼすべてが当院受診歴のない初診であり、通信環境も様々（スマホ、ガラケー、固定電話）であるため、オンライン診療ではなく電話診察の方式をとっています。

基礎疾患、症状経過は保健所から情報提供されます。電話で直近の症状を聴取し、経口摂取量や呼吸苦は無いかといった質問から全身状態を確認し、自宅療養可能と判断した場合は経口薬を処方します。年齢・基礎疾患など該当例は抗ウイルス薬も処方します。処方箋を市内の調剤薬局に送付し、薬局が患者宅に薬を届けます。

【今後の課題】当地では、感染者を診察可能な施設が少なく、病院 2 施設、診療所 1 施設しかありません。このため、軽症例は電話に頼らざるを得ない実情があります。

当初は電話対応可能な当院のみだったため、1 月の第 6 派以降地元の医師会に働きかけ、当院での対応をベースに診察マニュアルを作成し、内科系の診療所に配布、協力を依頼しました。これにより対応可能な診療所が増加し、より多くの依頼に対応できるようになりました。

今後も対応可能な医療機関を増やし、対応策をアップデートしていきたいと考えています。

【略歴】

- 2002 年 自治医科大学卒業（北海道 25 期）
- 2002 年 札幌医科大学総合診療科 初期研修医
- 2004 年 北海道立羽幌病院 内科
- 2007 年 江別市立病院 総合内科
- 2009 年 北海道立羽幌病院 内科医長
- 2011 年 江別市立病院 総合内科部長
- 2017 年 町立南幌病院 院長
- 2018 年 社会医療法人関愛会江別訪問診療所 院長（現職）

座長：日下 勝博（江別訪問診療所）、藤原 純一（由利組合総合病院）

へき地の医療をどうやって確保するのか ～遠隔医療の可能性～

原田 昌範

山口県立総合医療センターへき地医療支援センター

遠隔医療は、元来、離島へき地で限定的に認められてきたが、平成30年にへき地等に限らないオンライン診療の指針が整備された。コロナ禍となり特例措置でオンライン診療が事実上解禁になっても、オンライン診療を実施している医療機関は都市部に集中しており、へき地や離島等では有効に活用されている実例が少ない。山口県では、離島へき地の診療に携わる医師不足は深刻である。当へき地医療支援センターは、これまでクラウド型電子カルテ、オンラインカンファレンス、5G事業、オンライン診療等、へき地医療にICTを積極的に活用してきた。平成30年9月、離島へき地の地域包括ケアを推進するためにどんな遠隔医療が有用なのかを議論するため、関係者を集め「山口県へき地遠隔医療推進協議会」を6回主催した。その活動をきっかけに、厚生労働行政推進調査事業費にて、令和元年度より「へき地医療の推進に向けたオンライン診療体制の構築についての研究（H30-医療-指定-018）」、令和3年度より「海外の制度等の状況を踏まえた離島・へき地等におけるオンライン診療体制の構築についての研究（課題番号：211A2007）」というテーマで研究および実証の機会をいただいた。へき地医療の推進にあたり、諸外国におけるオンライン診療の取り組みを調査し、国内の離島へき地の現状を踏まえ、離島やへき地におけるモデルとなる導入事例を示すことが目的である。諸外国のオンライン診療、山口県での実証内容等、当研究班の取り組みを紹介させていただき、全国規模のネットワーク「へき地遠隔医療推進協議会（仮）」の設置を目指したい。

【略歴】

平成12年	3月	自治医科大学医学部卒業
〃	4月	山口県立総合医療センター（初期臨床研修）
平成14年	5月	岩国市立錦中央病院
平成17年	5月	山口県立総合医療センター（後期研修）
平成18年	5月	周南市国民健康保険鹿野診療所 所長補佐
平成20年	4月	萩市国民健康保険大島診療所 所長
平成22年	4月	自治医科大学地域医療学センター（臨床助教）
平成23年	4月	山口県立総合医療センターへき地医療支援部 部長
平成25年	4月	山口県立総合医療センターへき地医療支援センター センター長（現職）
平成30年	6月	公益社団法人地域医療振興協会 理事・山口県支部長
令和2年12月		日本遠隔医療学会 へき地遠隔医療分科会長
令和3年	4月	山口県新型コロナウイルス感染症対策室 主幹（兼務）
令和4年	4月	山口県山口健康福祉センター防府保健所 主幹（現職）
※平成23年～		山口県健康福祉部医療政策課 主幹（兼務）

座長：日下 勝博（江別訪問診療所）、藤原 純一（由利組合総合病院）

離島における遠隔医療の実際～佐賀県唐津市の取り組み～

山崎 温詞

唐津市馬渡島診療所

馬渡島(まだらしま)は佐賀県唐津市の日本海側に位置している、面積約 4 ㎡、人口約 300 人ほどの小さな離島である。島の医療機関は診療所が 1 箇所、医師 1 名、看護師 2 名(1 名常駐、1 名通勤)、事務 1 名の計 4 名での診療体制となっている。

新型コロナウイルス感染症の第 4 波が猛威をふるっていた令和 3 年 5 月、馬渡島で最初の罹患者が出た。当時はデルタ株が流行しており、現在流行中のオミクロン株に比べると感染力は弱いのだが、荒波に揉まれる小さなイカダのように、小さな島は瞬く間に感染の波に飲み込まれてしまった。島に常駐している看護師の感染も確認され、医師 1 人で検査、保健所への連絡、搬送の手続き、使用器材の消毒などを行わねばならない状況だった。

最初の感染者を確認してから 2 日後に急患が発生した。70 代男性の方が窒息したと診療所へ連絡が入った。すぐさま往診し、気管挿管による呼吸管理が必要と判断したが、残渣が多くてなかなかうまくいかない。吸引と酸素投与を行いながら唐津市内の病院へ搬送した。のちに判明したが、この方も新型コロナウイルスの感染者だった。

保健所から連絡が入り、2 週間診療所に付随する社宅で自宅待機となった。県の方針で全島民の PCR 検査が施行され、最終的に 15 名の陽性者が出たと報告を受けた。日中は代医に来ていただく事となり、不明な点があれば電話で連絡いただいて指示を出していた。困ったのは夜間である。島に医療関係者は私 1 人のみであり、自宅待機とは言えど何かあれば対応しなければならない。ただただ急患が発生しないことを願っていた。幸いにも急患は発生しなかったが、常に不安が付き纏っていた。

現在診療所にはオンライン診療の機材が設置されている。もしこの機材が新型コロナウイルス感染者の発生の際に整備されていたら、当時感じた不安は解消されていたのではないかと。現在診療所の電子カルテの運用状況も踏まえて言及していく。

【略歴】

平成 30 年 3 月 自治医科大学医学部医学科卒業
平成 30 年 4 月 佐賀大学附属病院で研修
平成 31 年 4 月 佐賀県医療センター好生館で研修
令和 2 年 4 月 唐津赤十字病院で勤務
令和 3 年 4 月 唐津市馬渡島診療所所長(現職)